跡見学園女子大学マネジメント学部紀要　第 6 号　(2008 年 3 月 15 日)

Northanger Abbey：未完成のヒロイン

——Jane Austen の小説の原型——

Northanger Abbey: An Incomplete Heroine

— A Prototype of Jane Austen's Novels —

内　藤　歓　修

要　旨

Jane Austen の前期の小説 3 作品の中で，本作品は書き直しの箇所が極めて少なく，初期の形態を保ったままで出版された．作者は作品を書き上げた後も，いろいろ手を加え改編したと言われている．本作品は出版者とも問題があって，書き上げた後殆ど手を加えていない状態で出版されたので，作者の小説作法の原型が読み取れる．

Austen の 6 編の小説は全て「夫探し」がテーマになっている．ヒロインは，将来夫となる若い男性との交際や周囲の人々との付き合いを通じ，幾つかの障害を乗り越えて，人間的成長をしていき，理想的な男性と結婚するに到るのである．特別異常な事件も起らず，日常の平凡な生活の中でストーリーは展開していく．

その典型的な形は既に本作品に現れている．しかし，本作品は当時流行のゴッシク小説に対して，批判的な面を多くもっていて，明らかにそのパロディである箇所が随所に見られる．ヒロインが成長をしながら結婚を成就していく筋と，ゴッシク小説のパロディ的側面を両立させながら物語は進んで行く．

Northanger Abbey は作者の前期の作品で，しかも手を加えることが少なかったために，ヒロインを始めとして登場人物像が粗削りで，完成度が低い代わりに，作品全体が若々しい感じを与え，かつ作者の基本的な小説作法がはっきりと読み取れ，興味深いものとなっている．本論ではヒロインらしくないヒロインの Catherine がゴシック趣味に惑溺しながらもそこから脱却し，また Thorpe 兄妹の欺瞞に満ちた人間性を見抜けるようになり，人間的成長をして，Henry と結ばれて行く過程を分析し，考察する．

*

Jane Austen の完成した6つの長編のうち前期に属する作品は執筆された時期が重なっていると思えるほど近接して書かれている．*Northanger Abbey* は，1796～1797年執筆の *Pride and Prejudice*（1813年出版）の後，1797～98年に執筆の *Sense and Sensibility*（1811年出版）に引き続いて，1798～1799年に執筆された[1]．当初 Susan という名で2冊本として書かれたが，暫く修正の手が入らないままにされていた．1803年までには最終的な推敲が行われ，兄 Henry に出版を託した．彼はその年の春出版者 Richard Crosby に渡し10ポンドを受け取った．Crosby は近刊予告を行ったが出版はしなかった．1809年になって Austen 側が Crosby に出版について催促すると，Crosby は出版を請け合った覚えはない．しかし支払った10ポンドを返金すれば原稿返却に応じると返事をしてきた．その後出版者の回答通りに10ポンドを払い原稿を買い戻している[2]．現在の *Northanger Abbey* の冒頭にあり，1816年に書かれた「作者からのお知らせ」（Advertisement by the Authoress）の中で Austen はこの作品は1803年には完成していたが，既に13年の年月が流れてしまったと断り書きをしている．この時に既に Susan という題名の別の小説が出版されていたため，題名も女主人公の名も Susan から Catherine と改めた．出版の意欲はあったが，執筆から相当の年月がたっていて，部分的には時代遅れの内容となってしまったためか，1817年の手紙[3]には，“Miss Catherine is put upon the Shelve for the present, and I do not know that she will ever come out.”と出版されていないことに言及している．その年の6月に本人が亡くなってしまい，兄 Henry が *Northanger Abbey* と題名を付け，同年12月に John Murry 社から *Persuasion* と合本の形で出版された．

作者の断り書きにもあるように，内容が古びてしまい，色々な面での変化に対応していないことを心配していることを考慮に入れると，成立に紆余曲折はあったが作品の内容は少なくとも1803年の完成以降実質的に大きく書き直したことはなかったようである．すると，*Northanger Abbey* は完成された作者の小説の最初の作品となり，作者の小説の原型を色濃く留めていると考えられよう．

**

主人公 Catherine Morland は幼年時代には容姿や容貌も家柄・家庭環境も物語の中心人物になるような特徴を備えていなかった．作者は，通俗なロマンスにおけるような，佳人薄命を思わせる美しいヒロインが次々に不幸に襲われ，絶体絶命の窮状に陥った時，ヒーローが突然現れて救出されるといった，読者の同情に訴え，感涙を絞る物語のヒロインと対極にいる人物を登場させている．*Northanger Abbey* の冒頭を読んだ読者は現代なら，「普通の女の子が平凡な生活をするなかで素敵な恋を見つける」などといった物語はまことにありふれたものと思う

であろうが，ゴシック小説が流行していた当時の読者にとっては，ステレオタイプ的な美人のヒロインと違って，ヒロインとしては不利な状況をウィットに富んだ解説とともに紹介される Catherine に新奇さを感じ，かつ親近感を抱き，容易に感情移入できたのではないだろうか．

No one who had ever seen Catherine Morland in her infancy, would have supposed her born to be a heroine. Her situation in life, the character of her father and mother, her own person and disposition, were all equally against her. Her father was a clergyman, without being neglected, or poor, and a very respectable man.... Her mother was a woman of useful plain sense, with a good temper, and, what is more remarkable, with a good constitution. [I,i][(4)]

こうして Catherine が当時の小説の典型的なヒロインになるには不利な要素がこれでもかというくらいに並べられていく．極く平凡な中流牧師の家柄という出自で，環境的にも，性格的にも，容貌的にもとてもロマンスのヒロインになれるような特徴が見られない．この平凡な家庭で Catherine は 4 番目の子供で長女である．家族は全員元気で，彼女が孤児になってしまうという悲劇的なことも起こらない．

作者はさらに彼女をヒロインの埒外に置こうと，彼女の平凡さ，特徴のなさ，更には，その容貌の悪さも強調する．

Catherine, for many years of her life, as plain as any. She had a thin awkward figure, a sallow skin without colour, dark lank hair, and strong features.... [I,i]

見目と共に，頭脳も才能も余り優れたところが見当たらない．音楽や絵の才能があるわけでもなければ，格別聡明というわけでもない．14 歳になっても男の子の好きなクリケット，野球，乗馬，また田舎を走り回るほうが読書より好きという少女で自由な子供時代を謳歌していた．教育を受け知識や技能を習得するには，彼女は余りにも本能的で野性的で，騒々しく乱暴で，拘束を嫌い，身体を動かすほうを好んだので，知的訓練からは極力逃れていた．それ故，物事の理解や分別については空想の世界に走り過ぎて失敗することがあった．だが，良識のある実際的な家庭で育った Catherine は従来のヒロインの持つ特質に欠けてはいても，愛情深く単純素朴な，「滅多に意地を張ることもない」謙虚さを備え，好ましい少女として描かれている．

このように，取り立てて素晴らしい長所を持っているわけでもない Catherine だが，「若い娘がヒロインになる時は，それを止めることはできない」[I,i] と作者が言うように，彼女はヒロインになるべく，15 歳の頃から変化の兆しが現れてくる．生まれついてのヒロインではないが，ヒロインになる運命なので，彼女はヒロインの読まなければならぬ本を読むようになる．かつては，勉強については教えられるまで何事も覚えず，理解もせず，時には教えられても理解できない場合もあった彼女も徐々に変化していく．また 10 歳の時には身中に内在していたヒロインとしての資質は眠った状態にあったが，年頃になるにつれ，先ず容姿が美しくなり，次い

でおしゃれが好きになる．父母をして “Catherine grows quite a good-looking girl, – she is almost pretty to day.” [I,i] と言わしめるほどに，大分女の子らしくなり，親たちも彼女の容貌に満足するようになる．

こうして Catherine はロマンスのヒロインたる資質を示し始めるが，前述のように作者はヒロインらしからぬヒロイン作りに作品の当初から終わりに至るまでこだわり続け，折りあるごとに彼女がヒロインらしくないことに言及している．

また，Catherine が真のヒロインになるには大きな条件が不足していた．17 歳になっても未だ男友達がいないし，近隣にはその候補になるべき若い男性が全くいなかったのである．それでは彼女の周辺ではヒロインの身に降りかかるべき冒険も起きない．彼女が順調にヒロインになれない条件が充分にそろっていた．ヒロインを巡るこのような状況は，18 世紀から 19 世紀初頭にかけての小説には珍しいことで，当時の小説に対する鋭いアイロニーとなっている．

いずれにしてもヒロインになるべく運命付けられている Catherine にこの不足事項を満たす出来事が起こる．毎日が単調で，彼女は “I can only go and call on Mrs. Allen.” という無聊を託っていたが，Morland 家と親しい Allen 夫妻が痛風治療のため 6 週間滞在の予定でバースへ行くことになり，彼女をお気に入りの Allen 夫人が一緒にバースに行こうと誘ってくれた．文学的，音楽的素養にも示されている彼女の平凡な性格や才能に似つかわしく，物語は無難に平凡に進展して行く．Allen 夫妻とバースに行く途中でも，別れ別れになったりすることもなく，馬車がひっくり返って，そのために素敵な男性と巡り逢ったりすることもない．またバースに着いた当座は知り合いは誰もいない．Catherine は手持ち無沙汰で心細い思いをする．一方頼りにしたい彼女のシャプロン (chaperon) の Allen 夫人は無能で当てにならない．作者の辛辣な筆で強烈に皮肉られている．

Mrs. Allen was one of that numerous class of females, whose society can raise no other emotion than surprise at there being any men in the world who could like them well enough to marry them. She had neither beauty, genius, accomplishment, nor manner. The air of a gentle-woman, a great deal of quiet, inactive good temper, and a trifling turn of mind, were all that could account for her being the choice of a sensible, intelligent man, like Mr. Allen. In one respect she was admirably fitted to introduce a young lady into public, being as fond of going every where and seeing every thing herself as any young lady could be. Dress was her passion. She had a most harmless delight in being fine.... [I,ii]

このように唯一の関心事が服装である夫人は，本来ヒロインを厳しく監視することにあるシャプロンとしての役目など頓着せず，Catherine を自由に行動させている．自分自身が楽しむことに忙しく他のことに構っていられないのと，無能で彼女にどう助言していいのか分からない

との理由で放任しているのである．結果として夫人のこのような頼りなさが彼女の自立を促すことになった．

Catherine が最初に舞踏会に参加した日は，Allen 夫人の関心事である身支度に時間を取られ，遅くなって舞踏室に入ることとなった．既にそこは満員の状態で，ただ混乱した群衆のなかで揉まれ，知った人は誰もおらず，ダンスの相手もなく疲れと欲求不満の気持ちが募るだけだった．だが，帰宅間際見ず知らずの 2 人の青年紳士が発した称賛の言葉を耳にし，彼女のつつましい虚栄心はどうにか満たされた．平凡なヒロインの平凡な幸福である．Catherine の見栄えのしない平凡さは当時の主人公としては珍しい特徴で，作者は冒頭から極めて意識的である．将来運命を共にする人と知り合うのも，極く平凡に Lower Rooms で儀式長が紹介してくれたからである．紹介されたのは Henry Tilney という名の，都会的に洗練されてウィットに富む青年である．彼は男性の主人公だが，ロマンス小説の主人公のようにその出自に秘密がある訳でもなく,「また何を職としているか分からない」といったところもない．Allen 氏はその晩に彼が聖職者で，グロスターシャーのかなり立派な家柄の出身であることを突き止めている．

一方 Allen 夫人は思いがけないことを材料に Henry の人物を正しく評価するという離れ業を見せる．着る物には目がない夫人は彼がモスリンの品定めができるということから，この初対面の相手の真価を見抜くのである．Lower Rooms での舞踏会で Henry が Allen 夫人の服を見てモスリン地の値踏みをすると，夫人はたちまち彼に関心を抱き始める．彼がモスリンに目が利くのは何時も妹のドレス選びの相談に乗っているからだということが分かる．“Men commonly take so little notice of those things...you must be a great comfort to your sister, sir.” [I,iii] と言って，即座に彼が信用できる人物であることを見抜く．後に第 2 巻で明らかにされるように，ノーサンガー寺院でも彼だけが妹の良き理解者である．作者はつまらない人物とされる Allen 夫人の口を通して時に思わぬ真実を伝える．折角知り合ったのに Henry はその後暫くバースを留守にして，Catherine のぜひ交友を深めたいという気持ちに一時停滞を余儀なくさせる．

Henry がバースを去ったその日，偶然 Pump-room で Allen 夫人は昔の学校友達 Thorpe 夫人と出会う．Thorpe 夫人と Catherine は親しく話すようになり，3 人の娘たちとも知り合う．Thorpe 夫人の長男 John と Catherine の長兄 James がオックスフォード大学で学友ということも分かり，Catherine と Thorpe 夫人の長女 Isabella はより親近感を抱き，会った途端に意気投合する．殊に Catherine は彼女を腹心の友 (confidante) と思い込み，大きな信頼を抱く．Isabella は Catherine より 4 歳年上で，彼女に比べて世間知に長けており，男性の扱い方も巧い．Catherine は Isabella に薦められて，当時評判のゴシック・ロマンスの代表作品，Mrs. Radcliffe 作の *The Mystery of Udolpho* (1794) を耽読し，すっかり恐怖小説の雰囲気に捉えられる．Catherine は Isabella に大きな影響を受け，confidante として信頼し切っているが，実は Isabella は外面と内実の一致しない偽善者で不誠実な人間である．彼女はゴシック小説に精

通しているように見せているが，余り知識がないことが，I,vi で示されている．ここで2人はゴシック小説について対話している．Isabella は博識を装っているそばから，その知識が如何に浅薄であるかを暴露している．彼女は親友の Miss Andrews にその全ての知識を依存しているが，Miss Andrews は流行小説は知っていても Samuel Richardson の *Sir Charles Grandison* は第1巻も読み通すことはできなかった．この対話で，Catherine の *Udolpho* への関心は本物であるが，Isabella のそれは見せかけに過ぎないことが知れる．Catherine が小説の話題を続けようとすると，Isabella はそれを遮って自分たちを見ていた2人の若い男性の方に話をそらせてしまう．彼女は気持ちが常に浮ついていて，性格が軽薄なのがよく表れている．彼女のこのような人間性は John と James の登場によって次第に露呈してくる．兄 John の軽薄さと相乗効果を起し，彼女の本性がよりはっきりと姿を現す．

Isabella の兄 John Thorpe は虚栄心の強い軽佻浮薄な若者である．

He was a stout young man of middling height, who, with a plain face and ungraceful form, seemed fearful of being too handsome unless he wore the dress of a groom, and too much like a gentleman unless he were easy where he ought to be civil, and impudent where he might be allowed to be easy. [I,vii]

過剰な自己顕示欲のために，物事を必要以上に過大で大袈裟な表現をし，自分のことを殊更に良く見せようとしている．この誇大表現癖は Catherine が彼に最初に出会った時から明らかにされている．馬車で走って来た距離を実際より長く言ったり，本当は大人しい馬を暴れる危険性があると言って同乗している Catherine を脅えさせたりする．このような言動は自分を誇大に見せ，人の注目を集めようとする気持ちの表れである．更には，後の場面で Catherine にダンスを申し込んでおきながら，平気でほったらかしにしておいたり，Tilney 兄妹と先約がある Catherine を強引に自分の計画に誘うという傍若無人で強引な振る舞いを見せたりする．この横暴さはゴシック小説でか弱い女主人公たちを苦しめる不良貴族のパロディであり，John の虚勢を示していることは明らかである．彼はこの小説で悪役を務めてはいるが，実はおめでたい単純な人物である．常に盛んに悪態をつき，使用語彙は貧困である．誉める時には 'famous' という形容詞を付け，quiz[5] などの流行語を使い意気がっている．文学などには一向に無関心で，馬とギッグという男性用の軽快な乗用馬車に夢中になっている．陽気で金離れがよく，無思慮で虚栄心が強く，リゾート都市バースのような町にとっては理想的なタイプの消費者である．

これと対照的なのは Henry Tilney である．

He seemed to be about four or five and twenty, was rather tall, had a pleasing countenance, a very intelligent and lively eye, and, if not quite handsome, was very near it. His address was good, and Catherine felt herself in high luck. [I,iii]

John に対する作者の皮肉たっぷりの説明と比べ，Henry の描写は非常に好意的である．Catherine

は彼に強く引きつけられるが，親友だと信じている Isabella とその兄 John に事ある毎に，彼との仲を裂かれるような邪魔をされる．この 2 人は彼女にとって親友の仮面を被った敵なのである．

John と Henry との対照的な違いがはっきり現れている場面が幾つもある．Catherine が John と初対面の時，話題を *Udolpho* に転じると，John は *Tom Jones* 以後出版された小説の中で，まあまあ立派なのは *The Monk* だけだと言う．*The Monk* は Matthew Gregory Lewis のゴシック小説の代表作とはいえ，扇情的・病的なところがある作品で，Henry Fielding の *Tom Jones* に比肩できるものではない．John が果たして本当に読書をしているのかどうか疑問を抱かせる発言である．本人は如何にも文学通のように小説論をとうとう述べるが，流行の小説 *Udolpho* の作者が Mrs. Radcliffe であることすら知らない．一方，Catherine は I, xiv の散歩の場面で Tilney 兄妹ともゴシック小説について対話している．Catherine があなたのような紳士は小説など読まないでしょうねと，Henry に問い掛けると，

"The person, be it gentleman or lady, who has not pleasure in a good novel, must be intolerably stupid. I have read all Mrs. Radcliffe's works, and most of them with great pleasure. The Mysteries of Udolpho, when I had once begun it, I could not lay down again; – I remember finishing it in two days – my hair standing on end the whole time." [I,xiv]

と言う．この言葉に気を良くして Catherine が "But I really thought before, young men despised novels amazingly." と言うのを聞き咎める．"amazingly" という言葉は Isabella がよく用いる大袈裟な感情表現だが，"It is *amazingly*; it may well suggest amazement if they do." と Henry はからかうような口調で言い，Isabella が Catherine に与える影響の好ましくないことを指摘する．また *Udolpho* は "the nicest book in the world" と思いませんかと彼に尋ねると "The nicest; – by which I suppose you mean the neatest. That must depend upon the binding." という返事がある．これも Isabella の影響で "nicest" を新しい意味に用いる彼女をからかい批判している．妹の Eleanor は兄のこの言葉の用法の厳格さを良く知っているので "a most interesting work" と訂正し Catherine に配慮を示す．Tilney 兄妹は Thorpe 兄妹の大袈裟な感情表現や流行語を批判する一方で，Catherine の飾らない言葉を高く評価する．

"I cannot speak well enough to be unintelligible."

"Bravo! – an excellent satire on modern language." [II,i]

率直さというのは時には大きな力を発揮する．兄妹は小説について意見を交換した後，歴史や絵画の話題に移った．Henry は Catherine が未熟ではあってもこの方面の良き審美眼を備えていることに満足した．この対話の話題の選択は兄妹の思慮深さと知的性格を表している．

Catherine がこのように Tilney 兄妹と親しくなるまでには幾つかの困難を克服しなければな

らなかった．彼女は暫く姿を見せなかったHenryにI,viiiの舞踏会で再会することができた．前回彼がCatherineに踊りの申し込みをしてくれたが大変残念なことにJohnとの先約があって断らざるを得なかったのをずっと気にしていたので彼女の喜びは一入であった．彼の妹のEleanorともここで初めて知り合うことになった．Eleanorは大層魅力的な女性でCatherineは是非知り合いになりたいと思う．

Miss Tilney had a good figure, a pretty face, and a very agreeable countenance; and her air, though it had not all the decided pretension, the resolute stilishness of Miss Thorpe's, had more real elegance. Her manners shewed good sense and good breeding; they were neither shy, nor affectedly open; and she seemed capable of being young, attractive, and at a ball, without wanting to fix the attention of every man near her, and without exaggerated feelings of extatic delight or inconceivable vexation on every little trifling occurrence. [I,viii]

Eleanorの優雅さや節度ある言動は，Catherineの親友Isabellaの感情過多で大袈裟な言葉や身振りと対極の位置にある．Isabellaは兄同様言葉遣いが稚拙である．それが彼女の人格を判断する指標にもなる．彼女の表現方法は無教養で洗練されたところを感じさせない．その舞踏会場でCatherineがIsabellaにEleanorがいることを教えると，

"Oh! heavens! You don't say so! Let me look at her this moment. What a delightful girl! I never saw any thing half so beautiful! But where is her all-conquering brother?" [I,viii]

慎みもなく好奇心を露にして感情の赴くままに，わざとらしい大仰な表現をしている．作者が上記引用文で，Eleanorの美徳として，持っていないことを称えているexaggerated feelings of extatic delightやinconceivable vexationをここでIsabellaは露骨に出している．また，"be amazed"あるいは"amazingly"という表現を頻繁に使い，"My dearest Catherine"や"the prettiest hat you can imagine"などの最高級を表す形容詞を好んで多用する癖がある．更に謎めかしたほのめかしを好み，男性を蔑視し，女性同士の友情に厚いというポーズを取るのである．この言動は淑女としては未熟で余りにも子供じみている．

Tilney兄妹とThorpe兄妹の言動が比較対照されながら物語は進み，Catherineを軸にして2組の兄妹の行動が摩擦を起していくこととなる．この舞踏会でCatherineは漸くTilney兄妹と親しくなれそうな機会が到来したのに，JohnとIsabellaの気紛れな干渉でTilney兄妹との時間が殆ど持てず不満な気持ちが高じ，会場にいる間周りにいるあらゆる人々が何かにつけて癇に障るようにようになった．それが急速に疲れに転化し，無性に家に帰りたくなり，帰り着くと疲れは異常な空腹に変わり，それが満たされると床に就きたくてたまらなくなった．これが彼女の悲嘆の究極であると作者は述べている．作者の言葉通り彼女は床に就くなりぐっすり

と寝込み，9 時間眠り続けた [I,ix]．目覚めると完全に元気を取り戻した．若い平凡なヒロインの面目躍如である．悲しんでも回復は速いのである．

Eleanor ともっと親しくなりたい Catherine はその日の午後，彼女との交友関係を深めようと Pump-room へ出掛けようと予定をしている矢先に，突然 John，Isabella，James の 3 人がドライブに誘いに来る．話題の 1 つとして出たようなドライブの計画が Catherine の予定も確かめずに突然に実行されようとするのに，彼女は戸惑いを隠せない．友人たちの勢いと Allen 夫人の無関心な外出への同意に促されて Catherine は半強制的な誘いに，Eleanor に未練を残し，不本意ながらもドライブに参加する．John の馬車に同乗した Catherine は彼の際限のないホラ話や支離滅裂な自慢話を聞かされ辟易し，疲れ果てて彼の人格まで疑い始めるようになった．

Little as Catherine was in the habit of judging for her self, and unfixed as were her general notions of what men ought to be, she could not entirely repress a doubt, while she bore with the effusions of his endless conceit, of his being altogether completely agreeable. It was a bold surmise, for he was Isabella's brother; and she had been assured by James, that his manners would recommend him to all her sex; but in spite of this, the extreme weariness of his company, which crept over her before they had been out an hour, and which continued unceasingly to increase till they stopped in Pulteney-street again, induced her, in some small degree, to resist such high authority, and to distrust his powers of giving universal pleasure. [I,ix]

彼女はここで自分の頭で考え判断することを覚えたのである．今迄外見や他人の意見に惑わされ正確な判断ができにくかったが，実際に自分が困難な場面に遭遇し，自己防衛本能が働いて自分に備わった判断力が目覚めていくのである．一方の John はお気に入りの Catherine を相手に自分をよく見せようと有り得ない自慢話や作り話をして得意になり，彼女の幻滅した気持ちなど構わず，自己満足に浸るのである．また Allen 氏が大金持ちであることを Catherine に確認し彼女を獲得することに意欲を漲らせる．彼は彼女が子供のいない Allen 氏の大きな財産を受け取ると勘違いしているのである．このことは後にノーサンガー寺院に招待された時，彼女に大きな影響を与えることになる．

Catherine がドライブから戻って来ると，Allen 夫人は Tilney 兄妹と午後の散歩で偶然一緒になったことを話す．Catherine は John がただ不愉快な男性であることを知っただけの楽しくなかったドライブと Tilney 兄妹に会えなかったという残念な気持ちで二重の身の不運を嘆くのであった．John に対しては，先の舞踏会ですっぽかされた約束や，今回のドライブの経験から彼に不快感を抱くようになった．妹の Isabella に対しても世間擦れした性格を本当には見抜けないながらも，彼女の不誠実さをかなり明瞭に意識してきたように見える．Isabella はドライブの夜，I,x の冒頭の劇場の場面で Catherine が席に着くやいなや，“Oh, heavens! my beloved

Catherine, have I got you at last?" と言って如何にも Catherine を待ち焦がれたように見せる．Catherine のことを "my beloved" とか "my sweetest" とか呼ぶが，紹介して欲しい Henry がいないと分かると，自分と James がどんなに気が合うかという話題に移り，その晩は彼女をそっちのけで James と 2 人きりの話題に没頭するのであった．Catherine が Thorpe 兄妹の人間性を見抜いたかのように，Catherine's resolution of endeavouring to meet Miss Tilney again continued in full force the next morning.[I,x] と作者はすぐその後書いている．この言葉は前日の昼間と夜の経験により Isabella や John から Catherine の気持ちが離れ，Tilney 兄妹の方へ一層傾斜していることを示している．

Catherine は朝 Eleanor を求めて Pump-room に出掛ける．Thorpe 兄妹や James から無事離れられ，Eleanor と話す機会が持てた．そこで，彼女は Eleanor に，この前の舞踏会で Henry に踊りを申し込まれたが先約があって，とても残念に思ったが断らざるを得なかった．彼が気を悪くしなかったか，とても心配である旨を話す．だが翌日 Tilney 兄妹も舞踏会に参加することを聞き，幸福な気持ちで別れる．その晩は煩わしい John を避けて Henry の踊りの申し込みを切望していた．今度失敗すれば今後望みはないと思ったからである．Catherine も人々の中で揉まれるうちに，次第に社交辞令を口にできるようになったし，John に話し掛けられても Henry の申し出を受けたいがため，聞こえぬ振りをしたりするようになった．その甲斐あって彼と踊れることになる．Catherine は彼との踊りのみならず，彼の機知に富んだ会話にも引き付けられる．満足のうちに時を過ごし，帰り際に Tilney 兄妹と翌日晴天なら午後郊外への散歩の約束をし別れた．作者はこのように月曜から，Henry を意識し引き付けられていく Catherine の様子を木曜の夜の舞踏会まで 1 つの流れとして描いている．

翌日の金曜日は生憎雨勝ちの曇天であった．Catherine は Tilney 兄妹を待つが，約束の時間になっても来ない．そこへ Thorpe 兄妹と James が来て，馬車で遠出に誘いに来る．彼らの強引さ，目的地がイギリス最古のブレイズ城であること，Tilney 兄妹が時間になっても来ないといった事情から，心ならずも彼らとの約束を裏切る羽目になり，このドライブに参加させられてしまう．馬を走らせている途中，Tilney 兄妹が歩いているのが見えたと Isabella が言う．Catherine は馬車から降ろしてくれるよう John に頼むが全く相手にされない．John は Catherine を拉致し拘束して彼女の自由を奪うことで意地悪な快感に浸っている．このドライブは計画が充分でなく時間が足らずに，目的地に達することもできず途中で中止する．帰宅した時 Tilney 兄妹が訪ねて来たことが分かり，愕然とする．その晩 Catherine が初めて約束した Tilney 兄妹との散歩を果たせず，惨めな気持ちを味わう時，作者は直接に解説を入れる．

And now I may dismiss my heroine to the sleepless couch, which is the true heroine's portion; to a pillow strewed with thorns and wet with tears. And lucky may she think herself, if she get another good night's rest in the course of the next three months. [I,xi]

この悲しみはヒロインに相応しい運命であると作者は説明している．この場面について作者の言葉は当時流行の感傷小説のパロディであろう．心身共に健康な Catherine にとってこのような夜も眠られぬ事態は I,ix での Henry と踊れずに失望した後不満と疲労を抱えてベッドに入ったのとは天地程違い，確かに正に悲劇と呼べるものであった．

翌日土曜日の朝，急ぐ気持ちに背を押されて Catherine は，結果として約束を破ってしまった前日の非礼を詫びようと Eleanor を訪ねるが，居留守をつかわれたようで面会できず屈辱の気持ちを抱きながら帰って来る．腹を立て怒りに任せて無礼な行為をすることを彼女は抑えた．世間の儀礼作法の掟に照らした時，自分の非礼がどういう反応を起すのが当然なのかについての知識に全く欠けていることをよく認識したからである．同日の晩劇場で Henry を見掛けたので，彼に目礼する機会を捉えようとするが，彼の視界にいるにも拘わらず，彼は彼女に気付かない．やっと Catherine に注目した時も冷ややかなお辞儀をしただけであった．“Catherine was restlessly miserable; she could almost have run round to the box in which he sat, and forced him to hear her explanation.” [I,xii] という作者の記述の後に，“she took to herself all the shame of misconduct, or at least of its appearance.” という言葉が来る．彼女は苦難にあっても自己反省の気持ちを失わずに少しずつ人間的成長を続けている．朝からの惨めな気持ちは変わらないが，芝居終了後に Henry が彼女たちのところに挨拶にやって来た時，彼女が彼に一生懸命事態の説明と弁解をすると，彼は気持ちを和ませ優しい微笑を浮かべてくれた．そして懸案の散歩の 1 日も早い実現が決定された．Catherine はここでやっと不安と苦痛から解放され幸福で有頂天の気持ちになる．同時に作者はこの場面で第 2 巻における彼女のノーサンガー寺院行きの伏線を敷いている．John が Tilney 将軍と親しげに話しているのを彼女は目撃するのである．彼らは Catherine のことを話しており，将軍は彼女がバースで一番美人だと考えていると John が言う．この時から将軍は彼女に大いなる興味を抱き始めるのである．

I, xiii の冒頭では次のように書かれている．

Monday, Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday and Saturday have now passed in review before the reader; the events of each day, its hopes and fears, mortifications and pleasures have been separately stated, and the pangs of Sunday only now remain to be described, and close the week. [I,xiii]

作者は Catherine の Henry に対する気持ちを日を追って克明に記し，1 人のヒロインについて，彼女の 1 週間を外面から描いている．この間彼女は幾つかの問題を解決しながら，Henry に気持ちを募らせ，Thorpe 兄妹の言動の危うさを理解していく．読者は Henry に対して働き掛ける Catherine の心，内面のドラマを克明に追跡することができる．一定の時の流れにおいて主人公を描いてゆく作者の眼は，ある特別の日時，特別の出来事を選び出してそこに劇的なものを見，描き出してゆく眼ではない．人物の心の動きを日常の社交の中で捉えてゆこうとするの

である．そこへまた一騒動が持ち上がる．幾多の波瀾の人生を経なければヒロインの像からかけ離れてしまうというのが作者の判断なら，この騒動は避けて通れないものであり，Catherineがヒロインになる必須の条件である．

Eleanorと約束の散歩を明日と決めた直後，金曜日に一緒にドライブした3人が来て，翌日の月曜日，前回果たされなかったクリフトン行きを計画したので参加してくれと告げに来た．Catherineは先約があり，当日はTilney兄妹と散歩を計画していると説明し，前回に懲りて断固として3人との同行には応じない．Catherineの動じない態度に業を煮やしてIsabellaは懐柔策から攻撃に手段を変える．Catherineが新しい友人のEleanorに好意を示し，古くからの親友である自分に冷淡で無関心になっていると責めた上で次のように言う．

"I cannot help being jealous, Catherine, when I see myself slighted for strangers, I, who love you so excessively! When once my affections are placed, it is not in the power of any thing to change them. But I believe my feelings are stronger than any body's; I am sure they are too strong for my own peace; and to see myself supplanted in your friendship by strangers, does cut me to the quick, I own." [I,xiii]

世慣れないCatherineもIsabellaのこの非難は奇妙で理不尽だと感じる．そしてIsabella appeared to her ungenerous and selfish, regardless of every thing but her own gratification. という気持ちを抑え切れなかった．この地の言葉はIsabellaの利己的な本性がはっきり示しているし，Catherine自身それを明瞭に感じ取っている．Johnが"I only go for the sake of driving you."とお世辞を言っても，"That is a compliment which gives me no pleasure."とピシャリとはねつける．兄Jamesにも頑固と非難されても，"If I am wrong, I am doing what I believe to be right."と初めて兄に逆らいながらも自己の正当性を主張する．一方Johnは勝手にEleanorに会いに行き，Catherineが自分たちのドライブに参加するので散歩には行けないと了解を取り付けて来る．Johnは万事することが自己中心的である．Catherineは自分の意志に反して，Johnが勝手に取った処置を知り非常に不愉快になり，3人の反対にも拘わらず，"If I could not be persuaded into doing what I thought wrong, I never will be tricked into it."と言って事情を説明するためにTilney兄妹を追い掛け，彼らの家まで行く．事の次第を説明し自分の立場を理解してもらう．Johnの奸計に気を悪くしていたTilney兄妹はCatherineの誠意ある言葉を聞き再び好意的な態度となった．この時のCatherineの断固たる態度や身の処し方は大きな進歩を示している．月曜日にHenryに再会して後，幾度かの障害に出会いながらも，積極的な訪問や弁解によってHenryの誤解を解き，Tilney兄妹との交際を深めていくことによって人間的成長をしているのは確かである．"she had attended to what was due to others, and to her own character in their opinion."と，直後の作者の解説にあるようにしっかりと自分で考え判断を下し，それに基づいて行動をしている．ここにCatherineは健全な価

値観と正義感を保持していることを証明していよう．彼女は田舎で純朴な人々の間で育って来たので，バースというリゾート地で出会った Thorpe 兄妹の偽善は思いがけぬことであった．最初はそれを見抜くことができず，彼らの判断に従っていた．そのため，心ならずも Tilney 兄妹との約束を破るという辛い経験をさせられた後，彼らの強引なやり方に怒りを覚え，Tilney 兄妹との約束を敢行することで，生来の資質を充分に示した．

Tilney 兄妹との楽しい散歩に満足した翌日，Catherine は Isabella から思いがけぬ知らせを受ける．彼女が兄 James と婚約したと言うのである．Isabella は愛する James と結婚できたら，わずかな収入でも充分だと言う．また Catherine のところに翌日来た John と，James たちの婚約について話をしている時，彼も彼女に対し求愛の気持ちをほのめかし，彼女の了承を得たと喜ぶが，彼女はそのようなことは露程も考えていなかった．彼女は John の自慢癖や厚かましさに嫌気が差していて，まともに相手にする気はない．妹の Isabella も James との婚約を期に Catherine の眼に欠点を晒すようになる．II,i で再び舞踏会の場面がある．Isabella は婚約者 James が留守のため，昼間のうちから今夜は踊る意志がないと言っている．夜 Catherine が Tilney 兄妹の席に行くと，ハンサムな若い紳士がその席にいた．兄妹から近々兄が来るという話を聞いていたので，すぐにこれが彼らの兄 Tilney 大尉だと分かる．この紳士も踊るつもりはないと大声で言っているのを Catherine は耳にする．暫くして Tilney 大尉は弟 Henry を脇に呼んで 2 人で何やらひそひそと話し合っていた．Henry は間もなく戻って来て，Catherine に向かい，兄がお友達の Miss Thorpe に踊る意志があるかどうか聞いて欲しいと言っていると告げる．これを聞いた真っ正直で一本気な Catherine は Isabella は婚約者 James と離れていて気が塞いでいるのでダンスするなどとはかけ離れた気持ちであるのを知っていたし，Tilney 大尉も今ダンスなどしたくないと言っているのを聞いていたので即座に断ってしまう．すると Henry は次のように彼女の考えを分析する．

“How very little trouble it can give you to understand the motive of other people’s actions.”

“Why?– What do you mean?”

“With you, it is not, How is such a one likely to be influenced? What is the inducement most likely to act upon such a person’s feelings, age, situation, and probable habits of life considered? – but, how should *I* be influenced, what would be *my* inducement in acting so and so?”

“I do not understand you.” [II,i]

この後すぐに Catherine が予想できないことが起こる．Henry の言葉の意味をうつむいて考えている時に，Isabella の声を聞いて顔を上げると，Tilney 大尉と Isabella が踊りの姿勢を取っていた．Henry に指摘された Catherine の行動基準からすると，眼前の Isabella の行動は

彼女にとって全く容認できるものではなかった．この舞踏会は3回目のドライブの後の出来事で，彼女はIsabellaたちの行動がどんなものであり，他人が自分の心を勝手に決めつけることへの不当さを痛感している筈なのに，彼女はIsabellaが兄Jamesを心から愛していることを疑わず，Tilney大尉はHenryやEleanorの兄だということもあって良識に従って行動するに違いないと信じている．もっとも，両親の庇護のもとで，生活の苦労も知らない娘が17歳でバースで社交界にデビューして，人の心の複雑さ変わり易さに出会った時，自分の正しいと思っている行動規範に則り，良心に従って行動するのは真っ当な生き方であろう．

勿論，従来のヒロインに要求されている理想的な行動様式から見ればCatherineの生き方は及第点にも及ばないかも知れない．Isabellaはロンドンの弁護士の娘だが新興階級なので財産も少なく誇れる門地門閥もない，謂わば経済的，社会的弱者の部類に属している．そんなIsabellaへの想像を欠いていて，彼女らの心理状態や行動の動機を察知できず，自分の抱いている価値観や世界観，人間関係についての理解を無意識に唯一絶対と信じ込んでいる．彼女の認識範囲外にある者の存在に困惑し，彼らの存在を認め理解して共存しようとするのではなく，彼らに自分の価値観を押し付けようとしている．厳しい言葉で言えば，彼らの自己認識は不十分であり，自分たちの身を巧く処することができないので自分が彼らのために有力な援助の手を差し伸べてやれると思っているかのようである．一般的に言ってこのような無自覚な考えは手に負えない傲慢さと紙一重になり易いものである．彼女は自己を客体視できないがために意識が自と他に明確に分離していない状態に留まっていると言えよう．それが故に判断の基準が自分自身のみという弊害に陥ってしまい勝ちである．

このように場合によっては純真・素朴であることは頑迷無知と背中合わせであると言える．Catherineも上の引用のHenryの言葉にあるように，自分の純真・素朴な心に照らして，好意的に相手の行動の動機を推し量るので簡単に，世慣れたTilney大尉やIsabellaの上辺の言葉や行動に騙されてしまう．しかし，純真・素朴が時には頑迷無知に見えようとも，その属性を備えている者が人が好ければ，人間性に欠陥を生じたり誤った方向に進んだりすることは避けられ，人の好意を勝ち取ることができることをCatherineが身を以て示すことになる．作者は彼女のこのお人好しな判断の甘さを笑っている半面，彼女の純真・素朴さと対照させてIsabellaやTilney大尉の利己的な不誠実さを，鏡に照らすように明瞭に映し出している．Catherineの堅固な(firm)性格と比較すると，Isabellaの堅固さは，Henryも理解しているように，誰に対しても言える程度でしかない．ダンスの件は別にしても“Of all things in the world inconstancy is my aversion.”とか“of all things in the world, I hated fine speeches and compliments.”などと主張して止まないIsabellaは誰よりもこの自分の言葉と裏腹な行動をしている．言動不一致な偽善者である．

Isabellaの偽善者振りは，Jamesの財産が明らかになるに連れて際立って表れて来る．彼が

彼女が期待した程財産を父から与えられないことが分かると，James と結婚するのに金など何の問題ではない，一緒になれるだけでよいと言っていたのが，傍目にも分かるように不満な様子を隠せない．Morland 氏が息子 James の結婚に付き年 400 ポンドの聖職録しか譲ってくれず，更に将来同額の土地の相続を約束するのが精一杯ということが彼女には不足なのである．Isabella は Catherine には James との結婚が聖職録を受けるまで 2 年半も待たなければならないのが辛いだけでお金には不満はないと言い訳をする．James と Isabella についてこのような心配を抱えている時に，Catherine は思いがけなくノーサンガー寺院に招待されて至福の気持ちになる．この招待は彼女に 2 つの幸福を与えてくれる筈であった．1 つは愛しい Henry と仲良しの Eleanor の 2 人と同じ屋根の下で暫く生活を共にするという楽しみと，もう 1 つはゴシック小説に刺激され聞くだけで興奮する，古い大寺院に対する情熱に応えてくれる期待である．

Catherine が幸福な気持ちでいる間も，Isabella の不可解な行動は益々顕著になる．婚約者 James がいるのにも拘わらず，Tilney 大尉との交流は度を過ぎて Catherine の眼にも余るようになって来たし，お金のことも問題にし過ぎていた．James が相続できる財産が少ないと分かって，この婚約をつまらないものと思い始めるのである．一方，Catherine は John が自分に結婚の申し込みをして承諾を受けたといって喜んでいるという誤った話を聞き大いに驚く．John は Catherine の気持ちなど考えもせず，自分の流儀で彼女に結婚の申し込みをしたと考えているが，その申し込みは相手には全く理解できない，仄めかしにもならない程度のことであった．これは彼女が自分と結婚してもよい程自分を愛していると勝手に思い込んでいるという誤解に基づいた行動である．他人の気持ちや行動の動機を知ることはできない，できるのは単なる推測でしかないという教訓は Catherine でも習得するのが難しいのに，軽薄な John では尚更困難なことである．Tilney 大尉が Isabella をダンスに誘った際，Catherine が Henry にたしなめられた他人に対する無思慮で断定的な言葉は実害はなかったが，John の身勝手な思い違いによる求婚は，妹 Isabella の結婚についての無分別な行動を見ていると，これからとんでもないことになりそうだと Catherine は想像できた．

実際財産と言えるものは何もない Isabella は玉の輿結婚を狙っている．James との婚約も誠実な偽りのない愛情に基づくものではなく，打算が根底にあるので，彼の財産の少なさに失望を露にする．James がバースを離れている間に姿を現した Tilney 大尉に目が自然に向くことになる．その様子が露骨であったので Catherine も Isabella を厳重に監視せずにはいられなくなる．The result of her observations was not agreeable. Isabella seemed an altered creature.(II, iv) と作者が書いているように，お人好しの Catherine の眼にも Isabella の言行不一致な態度は真昼のように明らかであった．読者の眼からして見れば，Isabella の裏表ある不誠実な性格は彼女が登場した直後から明らかな事実であったが，これまで Catherine は様々な疑わしい証拠を次々に突きつけられながら，なかなか彼女を疑い切れなかった．例えば，Isabella の今言っ

たことを次の瞬間には否定するような矛盾する行動に疑いを持ったとしても，すぐ彼女の言葉巧みな弁明にあって，Catherine は簡単に騙されて疑いを解いてしまっていた．そして彼女は Isabella に対し不信感を持ち，腹を立てながらも，Tilney 大尉との恋愛遊びを眼の前にしても最後の最後まで，打算的で不誠実な彼女の本性を見抜けずに，じれったくなる程その友情を捨て切れない．

Isabella については判断が曇り勝ちな Catherine も単純な真実や言いにくい事実をずばりと指摘する能力はある．Henry はこうした能力を高く評価している．その Catherine が

"But what can your brother mean? If he knows her engagement, what can he mean by his behaviour? "

"You are a very close questioner."

"Am I?–1 only ask what I want to be told."

"But do you only ask what I can be expected to tell?"

"Yes, I think so; for you must know your brother's heart."

"My brother's heart, as you term it, on the present occasion, I assure you I can only guess at." [II,iv]

Henry は彼女を "a very close questioner" だと言い，兄の心は推測するしかないと質問をはぐらかす．この質問は他の人の心が自分の心と同様に分かるとする彼女の何時もはまる陥穽だが，Tilney 大尉の今回の Isabella に対する恋愛遊びは Henry も幾分認めるところがあったと推測できる．Henry は以前から Isabella の打算的な行動に気付いており，彼女が Catherine の兄と婚約したのを知って，不誠実な Isabella とそれに気付いていない James との結婚が危険であると考え，Isabella の本性を暴くために上流社交界にあり勝ちな Tilney 大尉の行動をあえて咎めなかったように思われる．Henry は James を心配する Catherine に対して

Would he thank you, either on his own account or Miss Thorpe's, for supposing that her affection, or at least her good-behaviour, is only to be secured by her seeing nothing of Captain Tilney? Is he safe only in solitude?– or, is her heart constant to him only when unsolicited by any one else?– He cannot think this – and you may be sure that he would not have you think it. [II,iv]

この言葉は Henry が兄を使って Isabella の人間性や貞節を試しているように聞こえる．Catherine にはこの理に適った言葉に反論する気持ちはなかった．

Catherine は James と Isabella についてこのような不安を抱きつつ，ノーサンガー寺院の客となるのである．Henry と2人だけで同じ馬車に乗り，Tilney 家に向かう道々，Henry にこれから行くノーサンガー寺院はゴシック小説に出て来るような寺院なのかどうか興味津々で尋ねる．Henry は彼女のゴシック趣味は良く知っているので彼女に合わせ彼女の空想を掻立てるこ

とに興味を感じ，虚実を取り混ぜて語る．未だ 17 歳の無邪気な Catherine は半信半疑ながら，ひょっとして本当かもしれないと，彼女のゴシック趣味は嫌が上でも駆り立てられる．寺院は見たところ，何の変哲もない現代的な普通の建物であった．到着してすぐ，与えられた部屋の中で見付けた箱や古いタンスと悪戦苦闘したが，何の興味ある発見もできなかった．馬車の中で聞かされた Henry の怪談，更にはそれ以前に耽読したゴシック小説の雰囲気に支配されて，部屋の中に神秘的な物の存在がなくては気が済まなかったのである．彼女は愚かしい空想に屈辱を感じ，反省したが，好奇心は留まるところを知らず，すぐ次のミステリーの題材を求め妄想を逞しくしていく．寺院というゴシック小説的舞台に立った時，自分がゴシック小説の世界入ったように錯覚し，そこで起ること全てをゴシック小説風に解釈するのである．

朝食後 Tilney 将軍に案内されて庭園や各部屋を見せてもらう．Eleanor は歩きながら死んだ母の話をする．その話から察するに将軍は妻に苛酷だったようだ．Eleanor が建物の中の通路の 1 つを開けようとすると父が遮る．Catherine に母の部屋を見てもらおうと思ったのだと言う．母親は 9 年前に急死したが，Eleanor はその死に目に会えなかったと聞き，Catherine の胸に疑いの念が湧いた．将軍が案内したがらない寺院の一隅には Tilney 家の秘密があるに違いない．そこには死亡したと聞く Tilney 夫人が事情あって監禁されていて，深夜将軍が粗末な食事を彼女のところへ運んでいるのではないか，或いは偏狭で冷ややかなこの将軍自身が夫人を殺害する罪を犯しているのではないかという陰惨な出来事へまで，Catherine の想像は広がって行く．将軍の秘密を暴くために，妄想に捕らわれた Catherine は Tilney 夫人の亡くなった部屋の探索に乗り出す．その結果，彼女の眼にしたその部屋は広々として立派な家具の入った部屋で，2 つの窓から暖かい西日が楽しげに差し込んでいた．秘密など何もなかったのである．Catherine の抱いた空想は悉く迷妄であった．彼女はすっかり恥じ入って部屋を出たところで，Henry に見付かってしまう．彼は現代のイギリスに凶悪なことなど起りよう筈がないことを説いて，彼女の将軍に関する疑念を晴らす．

“Consult your own understanding, your own sense of the probable, your own observation of what is passing around you – Does our education prepare us for such atrocities? Do our laws connive at them? Could they be perpetrated without being known, in a country like this, where social and literary intercourse is on such a footing...? Dearest Miss Morland, what ideas have you been admitting?” [II,ix]

Henry にこのように自分の行き過ぎた空想を指摘され，惨めな気持ちで現実の世界に引き戻された．次の第 10 章の冒頭で The visions of romance were over. Catherine was completely awakened. と書いて，ノーサンガー寺院での Catherine の冒険が如何に愚かなものであったか作者は示している．Catherine が寺院に抱いた期待と現実にそこに見たものとの落差を通して，言い換えればゴシック的幻想と日常的現実とを対比させてゴシック小説の馬鹿馬鹿しさを批判

している．更にCatherineのこの行動はIsabellaが彼女にゴシック小説を勧め耽溺させた悪影響から脱却し，彼女の真の姿を悟る糸口となっている．

このようなCatherineの覚醒があった後間もなくしてIsabellaの変心と婚約解消を告げるJamesの手紙が彼女のもとに届き，またIsabella自身の手紙がそれに続いて来る．この2通の手紙によって彼女の眼は開かれIsabellaの正体を完全に認識するに到る．Isabellaの本質が疑う余地がない程明らかになったからである．Catherineの犯す最大の過ちはこのIsabellaを親友と錯覚し，なかなか本性を見抜けなかったことであるが，それは決してゴシック小説を耽読したためではなかった．Isabellaを見誤ったのは，取りも直さずCatherineの精神の未熟さによるためであった．田舎から出て来たばかりの経験不足で純真な少女であるCatherineがIsabellaの都会ずれした人間性の裏側が見抜けないのは当然であった．しかし様々な経験を重ねた末にIsabellaの本質を認識することができたのである．Isabellaのバース滞在の目的は男性であり，それも美男子で裕福な結婚相手を獲得することであった．Catherineの兄Jamesと婚約するために彼女を利用し，Morland家がそれ程金持ちでないことが分かると，美男子で金持ちのTilney大尉に乗り換えようとする．CatherineやJamesには愛情深い腹心の友，恋する女，そして誠実な婚約者を演じながら，気取りや媚で本心を隠しつつ，少しでも有利な結婚によって地位を高めようとTilney大尉に接近するが，財産も地位もないIsabellaとなぞ最初から結婚する意志は毛頭ない大尉には簡単に捨てられてしまう．軽薄で落ち着きがなく，自惚れの強い，自己中心的なIsabellaは有利な夫探しに殆ど成功したように見えたが，結局2人の男性のいずれとも結婚できない．Isabellaは最後の悪足掻きとも言うべき手紙を書き，Jamesが自分について何か誤解をしているらしいので仲を取りなしてくれるよう頼んで来る．経済的，社会的な立場の弱さの故に，巧く世渡りをするという世間知を狡猾に使い，自分の個人的な喜びや利益を追求する余り，誠実さという重要な社会的原理を彼女は純真素朴なCatherineにもはっきり分かるように裏切ってしまったのである．狡猾さと美貌を背景に自分の社会的階級を上げようと露骨に振る舞い，金銭的利害から平然とJamesの誠意と結婚の約束を踏みにじり，より金持ちのTilney大尉と恋愛沙汰を起し，大尉に相手にされなくなると旧の鞘へ収まろうと見え透いた言い訳をする．Catherineの単純，素朴さと対照し，Isabellaの上辺を愛想のよさで覆った狡猾に対して痛烈な批判がなされている．彼女は浅はかで真実味に欠け偽善に満ちた恥知らずの女性で，愛を偽り，不実で打算的な動機で行動する女性の象徴である．ゴシック小説や感情小説のヒロインのパロディになっている．身勝手なIsabellaの手紙を読みCatherineは心底憤りを覚える．

Such a strain of shallow artifice could not impose even upon Catherine. Its inconsistencies, contradictions, and falsehood, struck her from the very first. She was ashamed of Isabella, and ashamed of having ever loved her. Her professions of attachment were now

as disgusting as her excuses were empty, and her demands impudent. "Write to James on her behalf! – No, James should never hear Isabella's name mentioned by her again." [II,xii]

Isabella に関しては Catherine は完全に目が覚める．ゴシック趣味が引き起こした迷妄と親友 Isabella の悪影響から脱却した Catherine を待ち受けるのは Henry の求婚であるがその前に厳しい試練が横たわっていた．

Catherine の寺院滞在が 1ヶ月程になった時，将軍は用事があってロンドンに行き暫く留守にする．Henry が家に居合わせなかったある日，突然帰宅し，理由も告げずに彼女を乗り合い馬車で 1 人切りで実家へ追い返した．ひどく屈辱的で無礼なやりかたであった．Catherine はこの訳の分からない仕打ちに家に帰っても放心の日々を送る．事情は程なく尋ねて来た Henry によってはっきりさせられた．

そもそも将軍は子供の結婚相手に財産と家柄の両方を求めていた．以前将軍は劇場で John Thorpe と話すうちに，Catherine はこの双方の条件を満たす令嬢だと思う．その時 John は Catherine を何れ自分の結婚相手となる人であると一人合点していて自慢の気持ちから得意になって彼女を誉め，財産や身分も実際以上に誇張して将軍に話す．将軍は彼の話を鵜呑みにして，彼女を Allen 氏の莫大な財産の相続人と勘違いし，Henry の結婚相手にしようと，自分の大邸宅に招待した．そして今回ロンドンで John に再会した時は Isabella と James の婚約は破棄されており，John も Catherine に振られた後なので，腹いせも手伝って「誇大に割り引いて」彼女の実家の経済状態を暴露した．将軍は Henry の結婚相手として Catherine にその資格がないと知るや，それまでの愛想の好い慇懃な態度を一変させ John の言葉だけに躍らされて，腹立ち紛れに彼女を寺院から追い出しに掛かった．礼儀正しいエレガントな紳士に見えた将軍も，John や Isabella と同種類の，打算的なつまらない人間に過ぎなかった．この作品に登場する副次的人物でバースの部分に登場する者は，リゾート地を背景に軽薄で世俗的であり，寺院の部分に登場する者はエレガントであるという違いはあるが本質的には同じ種類の悪を抱えている．これらの人物は自分の言葉に誠実でないし，打算的である．勿論これらのことは犯罪ではないが，重大な性格上の欠陥であることは間違いない．飾った言葉で彼らの不誠実な人格を覆い隠しており，Catherine，Henry，Eleanor の率直な物言いと好対照をなしている．

作者は不誠実という「悪」についてどういう対処をしているであろうか．John と Isabella は永久に Catherine の尊敬を失い，彼女の世界には再び現れることはできない．だが，Tilney 将軍と大尉の父子には何の罪も罰も課せられない．父親の罪は息子 Henry が償う形で決まりがつけられる．Catherine に対する侮辱である，父の分別を欠いたやり方を Henry は息子として恥じ，父に抗議し喧嘩をしてまで，彼女のもとへ急行し詫びる．彼女の自分への愛情に報いたい気持ちもあって詫びは徹底したやり方で行われる．絶対権力者である父の意志に背いて，「無

一文」の Catherine に求婚する．彼の思い切った行動は将軍の非を認め，償いをさせずにはおかない作者の強い意図を間接的に表したものと考えられる．しかし将軍は飽くまで俗物で，娘 Eleanor が貴族と結婚することによって，自分の虚栄心が満たされてやっと，Henry の結婚に同意を与える．物語の形はヒロインの玉の輿結婚で，作者の前 2 作のそれと共通している．

Henry の愛情は自発的なものでなく，感謝の念から発していたと作者は告白している．

I must confess that his affection originated in nothing better than gratitude, or, in other words, that a persuasion of her partiality for him had been the only cause of giving her a serious thought. It is a new circumstance in romance, I acknowledge, and dreadfully derogatory of an heroine's dignity; but if it be as new in common life, the credit of a wild imagination will at least be all my own. [II,xv]

Isabella の不誠実に振り回され，ノーサンガー寺院でゴシック趣味に突き動かされた愚かな行為を自制できず，幾つかの失敗をし，苦しみを経験しても，作者が書こうとした「本当の小説」の主題である「人生への旅立ち」の条件には少し不足である Catherine の成長も，従来のヒロインの全ての面での完璧さと比べると，現実の則し称賛すべきもので説得力もある．読者は完全に夢想から覚めてしまった後のひどく謙虚で大人びた Catherine よりも，それ以前の Catherine にこそ魅力を感じるのではなかろうか．しかも Catherine には知育者たる Henry が付いており，更なる成長は充分期待し得る．ここに新しい型のヒロインが登場した．上掲の引用文での作者の自負心は新しい小説を書いたという満足感に裏打ちされていよう．より成長するヒロインが次に書かれる小説の中に期待されるのである．

注

(1) *Northanger Abbey*: Introductory Note p. xi.

(2) ibid.: p. xii.

(3) *Letters*: p. 333, Letter to Fanny Knight, 13 March 1817.

(4) 前の数字が巻，後ろの数字が章を表す．I,i は第 1 巻第 1 章を表す．

(5) quiz は名詞の場合，The Oxford English Dictionary によると，初出が 1782 年．Samuel Johnson の「英語辞典」(1755) には収録されていない流行語．

参考文献

[1] R. W. Chapman (Ed.): The Oxford Illustrated Jane Austen: *Northanger Abbey*: Oxford University Press: 1965.

[2] Le Faye, Deirdre (Ed.): *Jane Austen's Letters*: Oxford University Press: 1997.

[3] Austen-Leigh, J. E.: *Memoir of Jane Austen*: Oxford University Press: 1926.

[4] Cecil, David: A Portrait of Jane Austen: Constable: 1979.

[5] Craik, W. A.: *Jane Austen*: The Six Novels: Methuen: 1965.

[6] Duckworth, Alistair: *The Improvement of the Estate*: Johns Hopkins University Press: 1971.

[7] Jenkyns, Richard: *A Fine Brush on Ivory*: Oxford University Press: 2004.

[8] Lane, Maggie: *Jane Austen's World*: Carlton Books: 2005.

[9] Lascelles, Mary: *Jane Austen and Her Art*: Oxford University Press: 1979.

[10] Le Faye, Deirdre: *A Chronology of Jane Austen and Her Family*: Cambridge University Press: 2006.

[11] Litz, Arthur Walton: *Jane Austen; A Study of Her Artistic Development*: Oxford University Press: 1965.

[12] Marghanita, Laski: *Jane Austen and Her World*: Thames and Hudson: 1969.

[13] Mudrick, Marvin: *Jane Austen: Irony as Defence and Discovery*: Princeton University Press: 1952.

[14] Roberts, Warren: *Jane Austen and the French Revolution*: The Athlone Press: 1995.

[15] 海老池俊治：Jane Austen 論考：研究社：1968.

[16] 田辺昌美：改訂 ジェイン・オースティンの文学：あぽろん社：1981.

[17] 鈴木美津子：ジェイン・オースティンとその時代：成美堂：1995.

[18] 直野裕子：ジェイン・オースティンの小説：開文社出版：1986.

[19] 蛭川久康：ジェイン・オースティン：英潮社：1977.

[20] ポール・ポプラウスキー編著：ジェイン・オースティン事典：鷹書房弓プレス：2003.